

第3回里山シンポジウム全体会 18分科会報告

司会・進行 中村俊彦（千葉県立中央博物館副館長）

中村)

18の分科会の司会を仰せつかりました中村と申します。県中央博物館に勤めております。今日までに18分科会中、14の分科会が終了しました。あと、4つの分科会が残っておりますが、今後の予定も含め18全部の分科会の報告をしていただきたいと思います。時間も限られていますので、1つにつき2分～2分半の間で、各分科会の活動について、これからの予定を含め、阿蘇中の生徒のみなさんに負けないように発表していただきたいと思います。それでは初めに、1.「里山と政策」の分科会からお願いします。

1. 里山と政策（小西由希子）

政策分科会を担当しました小西と申します。私たちは、里山の活動を後押ししてくれる可能性のある環境税と森林環境税について、環境省から、また県の方から、地域の方からお話を伺いました。



まず、環境税について。これは聞きなれない言葉かもしれませんが、CO2の排出を減らしていこうということで、石油の消費について税金を賦課していこうというものです。環境省でも考えられているものです。例えばドイツでは、1兆9千億円もの環境税が年金の保険料にあてられているという前例があります。

次に森林環境税です。名前は似ておりますが性格的には異なり、これは国が徴収するのではなく各自治体が徴収するもので、実は千葉県でも昨年までに検討を重ねてきたもので、すでに14の県で導入済みとのことでした。この税の取り組みの中で私たちが学ぶことができたのは、特に社会資本に対して住民が共同で投資していくという考え方、また町の中で山などをどうしていくのかということを経営者が考えるという、新しい合意形成のしくみがここで提案されてきているということです。また、地方自治体が税を徴収することで、そこでできた政策を国にあげていくという、これまでとは逆に下から上に政策をあげていくという新しい考え方を学ぶことができました。そして、森林環境税が千葉県で導入されるかはまだ難しいことではある

のですが、一番議論されたのは、生業としての山の保全と市民が楽しんでやっている里山保全が、まだそれぞれじっくりと考えられていない、それからお金をどこにどう投入されていくかの議論もされていない、ということがわかりました。ありがとうございました。

中村)

税金の話ですが、私はもうずばり「里山税」というものも必要ではないかと思えます。市民だれもが税金は増やしたくないと思うのですが、例えば1人100円でも600万県民であれば6億円になりますよね。一年間に、里山のために100円の税金をお願いしますと言えば、皆さん承知してくれるのではないかと思います。そんなことも含めてこれから検討していきたいと思えます。では2.「里山と水環境」をお願いします。

2. 里山と水環境（桑波田和子）

水循環を担当した桑波田と申します。よろしくお願いいいたします。私たちは、水はとても大切だということにはわかっているのですが、健全な水循環にするにはどうしたらよいか、私たちにできることは何かを考えるために、まず谷津田の水循環を知ろうと、4月15日に分科会を開催しました。この日は、午前中に「里山



と水循環」、午後に「里山と水鳥」の分科会ということで、一日里山の水について考える場となりました。

まず、谷津田の地下水と湧水の流れ、開発に伴って変化していく里山と水の関係等について、進藤先生にお話をいただきました。次に、八街市にある印旛沼の大田谷津というところで、大地に降った雨が地面にしみて湧水として湧き出しています。その物質の循環の調査を行っておりまして、その報告を県の河川行政の方から頂きました。3番目には、その水を水田で溜めることによって脱窒効果があるということで、水田の水質の浄化について、研究センターの小倉さんにお話をいただきました。

まとめになりますが、みなさんもお存知の通り開発によりどんどん消えていく里山と消えていく湧水、そ

れに伴って水辺が減少したり、不法投棄のゴミによる汚染、窒素分の高い水、こういう現状をもとにしてどういう風に考えていか話し合い、その結果、地下水の水質を保全できる土地利用と開発を進めていきたい、水田による水質の浄化にもさらに期待していきたい、ということになりました。最後になります、きれいな水を取り戻し守っていくために、谷津田にゴミを捨てないで欲しい、そして冬季湛水をどんどんすすめて欲しいと思います。ありがとうございました。

中村)

昨年、この八千代市で、印旛沼水循環健全化会議の「わいわい会議」を開催しました。まさに八千代市の里山が印旛沼の重要な水源になっております。是非、みんなの重要な水源としても、一緒に里山や谷津田を守っていききたいと思います。では、3.「里山と水鳥」をお願いします。

3. 里山と水鳥 (荒尾 稔)

荒尾と申します、里山実行委員会の事務局長をしております。今回、里山と水循環と合わせて、一連の水環境の健全化をテーマに分科会を開催いたしました。印旛沼の水の健全化という視点で考えた時に、人間的、化学的な観点からではなく、渡り鳥の観点から考えて



みたらどうか、というのが重要なキーワードになりました。水の健全化が優れているといわれている島根県の国土交通省の岩瀬様にお越しいただき、講演していただきました。島根県ではすでに、沿岸域の事業、流入河川対策を優先的に行う形で水環境の改善に主体的に取り組んでおり、その結果、渡り鳥の個体数が印旛沼とは非常に違うことを、一つの論点として考えさせていただきました。

千葉県では、実は水辺の90%を埋め立てておりまして、多数の水鳥が絶滅しています。この水鳥をどのように復活させるかが、この分科会の一つのテーマでもあります。同時に、今年の冬の大雪の影響で、特に新潟県辺りから関東への渡り鳥の道が復活したことも報告されました。それから印旛沼周辺の鳥類相についても千葉中央博物館の皆様から、調査報告を等と、ご提案をいただき、最後に水健全化の為の施策と言うことで、担当課の方からお話いただきました。

結論としては、生活廃水については住民の共同参加がさらに必要であり、様々な工事に関わることは、長期的なミチゲーション、モニタリングが必要、自然のリズム形成と農業サイドの協力、雁や白鳥の個体数が増加傾向にある今、それらを受け入れるために、印旛沼そのものの自然なサイクルを取り戻すことが必要であるという結論になりました。以上です。

中村)

本当に千葉にはかつて、トキやコウノトリもたくさんいて、特に印旛沼周辺は水鳥たちが東アジアの飛来拠点としていたところ。ぜひぜひこれをまた復活させていきたいですね。次に、4.「里山と信仰」よろしくをお願いします。

4. 里山と信仰 (鈴木優子)

里山と信仰分科会の鈴木です。よろしくお願ひします。4月22日、中央博物館で里山の神様との交わりをテーマに開催しました。65名のご参加をいただきました。目的は、里山に祭られた庚申塔、氏神様、道祖神、弁財天、水神、山の神、田の神、稲荷、辻斬り、などの信仰の意義を再考し、私たちへのメッセージを知ることでした。その内容は、講演はケビン・シュートさんから「里山の神様を訪ねて」、中央博物館の白井豊さんから「村の中の聖なる場所、異界との接点：歴史、地理学の観点から」、同じく中央博物館の中村俊彦さんから「里山における神様の意義」をビジュアルにお話



していただきました。後半は、会場から頂いたご質問を中心に語り合いをしました。詳しくは、入り口のホールの所にパネルを出しております。また、アーカイブにも載せておりますのでぜひご覧下さい。

まとめとしまして、里山のように信仰に基づく自然保護が残っているのは、世界中でも日本だけといわれています。里山の信仰は、自然との共存、公共心、共同体の存続への願いを伝え、また心のよりどころでもありましたが、今は効率化優先のために失われつつあります。その代償が必要か、との課題もあります。私たちも、自然と人間の在り様を学びました。メッセージとしまして「里山にゴミを捨てると、祟りがある～」以上です。

中村)

私から一つ補足させていただきたいのですが、よく宗教と信仰を混同されますが、二つは違います。宗教は、教祖・教団・教典があるもののことです。信仰というのは、一人一人の心の問題です。そして日本では、信仰が自然と人々との結びつきをしっかりと担ってきた、ということをお忘れてはならないと思います。では、次に5.「里山と観光」をお願いします。

5. 里山と観光（浅井 信）

里山と観光を担当しました、浅井と申します。私たちの分科会のテーマになりました「観光」というのは、里山に住んでおられる方々以外の、都市部に住んでいる地域外の方々を里山に入れることによって起こる経済活動、という風にいええると思います。今回は、南房総の平久里にてワークショップを行いました。平久里には、今ではめずらしくなくなってしまった茅葺きの家が残り残っていましたので、そちらに集まり、中があまり広くはないため参加者 23 人でのワークショップとなりました。午前中は、地元の方々に 3 班に分かれて案



内していただき、お昼も地域の方に里山の幸の料理を作ってもらっていただき、それを堪能しました。午後は、午前中に歩いた所で五感で感じたことをそれぞれマップに作成し発表し合いました。

観光というものをいきなり地域の中に持ち込んでも、地域の方々にとっては抵抗があります。まずは他所の方を地域に入れる場合に、どんな問題が発生するか、またそれはどう解決することができるかという共通認識をもつことが大切ではないかと、このワークショップを開催しました。平久里は、観光の一番大事な要素である景観という点においてはとても素晴らしく、司会者の中村先生によると千葉県一の景観をもった所だということです。また環境という点でも、ゴミもほとんど落ちていないですし、歴史・文化についても、古代からの古い歴史をもった所という、観光における3つの要素の整った地域なのです。あと残っているのは人づくりです。

いずれにしても、里山は桃源郷のような所ですので、いきなり他所の人を入れるわけにはいきません。これからどのように人に入っていただくかが課題です。今回のワークショップで得られた共通認識を基に、行動を起こしそれを続けていくことが必要であるとい

う結論に達しました。以上です。

中村)

千葉の里山は世界一。これは千葉県内のどこもそうなのですが、しかし、多くは残念ながら荒れていたりゴミで汚れたりしています。しかし平久里は本当に美しい。千葉の里山随一といっても過言ではないと思います。富山、伊予が岳を背景に素晴らしい里山が展開されています。ぜひ皆さんも行ってみてください。では次に6.「里山と医療・福祉」をお願いします。

6. 里山と医療・福祉（赤城建夫）

ワークショップ、「森林療法の体験」ということで1年間やらせていただいています。赤城と申します。ワークショップは4月29日に第1回目を行いまして、あと3回残っているところです。

森林に入りますと、みなさんご存知のようにちょっと心が動いてきます。実は、自然の中に入ると私たち一人一人にそういった力が働いてくるのです。そういう時、私たちは自分の心の奥底の何かと直面する事になるのです。気づかない場合は別問題なのですが、そういった力を、私たちは人を癒すために使います。私は、人の心が揺れたときに支えるのが本当の援助者だと思っています。



では、どうやって行うのかというと、この方法を探っていくことこそが森林療法の体験なのです。私たちは、心を豊かにしていく、人間の良い面に焦点を当てた考え方・理論を基礎にしたテーマをもって活動しています。

具体的には、このホールの入り口にパネルを展示しておりますので、ぜひみて行って下さい。また、8月、11月、2月にも、資料に記載されてあるテーマのワークショップを行いますので、ぜひみなさん体験しに来て下さい。お待ちしております。

4月のワークショップでは、山の中に座って音を聴いたのですが、ただ座って聴くだけなのですが、この準備までに1時間くらいかかります。これからは健常者にも活動の幅を広げて行きたいと思っています。以上です。

中村)

千葉県では、森林と医療や療育についての研究が進められています。今日お越しいただいております、大槻副知事さんを中心にみどり推進課のみなさんたちが、緑の医学的・教育的効果について研究されていますが、この成果の発表が待たれるところです。日本の最先端の研究発表がされることを期待しております。では次に7.「里山と野生動物」をお願いします。

7. 里山と野生動物（石山 大）

第7分科会の副代表をさせていただいた石山です。里山を利用しているのは人間だけではありません。野生動物たちも、里山を大いに利用して暮らしています。今回私たちは、午前中に関西野生動物研究所の川道武男理学博士と川道美枝子理学博士をお呼びして、里山と野生動物についての講演をしていただきました。午後からは谷当グリーンクラブに場所を移し、アウトドアでのディスカッション（お酒も交えながら）を行いました。また、野生のサルやイノシシから農作物を守るための電気柵を実際に張る体験もしました。午前中は60人以上、午後も30人以上の、学生や行政の方々も交えて大いに議論することができました。



午前中のまとめとしては、鎮守の森の受動的役割について川道武男先生から、美枝子先生からは野生動物と私たちの関係をどう考えていくかについてお話いただきました。動物との関係については、例えば私たち人間は野生動物に対して、一方では餌付けをし、一方では農作物を荒らすと石を投げるといった二面性をもっているわけです。そういった私たち一人一人がしっかりと考えていかなければならない問題についてお話いただきました。

結論としては、昔のように人間と動物が共存していくためには、里山を愛し里山のサイクルを回していくことが、里山の野生動物を守ることに繋がっていくのではないかと、ということになりました。ありがとうございました。ホールにパネルも展示しておりますので、ぜひご覧下さい。

中村)

動物は原生自然に多いと思われている方々が多いのですが、里山のような二次的な自然環境に依存している動物もたくさんおりまして、里山がなくなると種に

よっては絶滅してしまう状況もあります。しかし、今、外来種の問題や野生動物の農作物への被害等もありますので、やはりこれは動物と人がお互いに対立するのではなく、共存していける道を模索していくことが大切であると思います。どうもありがとうございました。次に、8.「里山と竹林」をお願いします。

8. 里山と竹林（田代武男）

竹分科会の田代です。竹分科会は4月30日に千葉県中央博物館の研修室にて行いました。テーマは、竹の特性と竹害対策ということで、目的は竹についての基礎的な知識の普及と竹害に対する認識の啓蒙です。



ご存知の通り、最近では里山において竹が異常繁殖しておりまして、放竹林がゴミの温床になっています。このように竹害が顕著であるにもかかわらず、竹の有用な面ばかりが強調され竹の害はなかなか声になりません。また、竹の猛烈な繁殖力に対し有効な対策が取れていないのが現状であります。この第8分科会では、竹の特性について説明し、竹の枯殺について具体的な実験状況等についてスライドを使って紹介しました。例えば、ラウンドアップハイロードという農薬を竹幹に注入して枯らせたりしています。

農薬を使うという点については、非常に抵抗がある方もおられると思いますので、農薬を使わない方法も紹介しました。これは昔から行われてきた方法ですが、孟宗竹・真竹の特性として、7月下旬になると竹の子が出なくなり、8月上旬から9月いっぱいにかけて地下茎に栄養を蓄えるというのがあります。この特性を生かして、7月の下旬から8月上旬に竹を切ってしまうと、かなり枯殺することができます。お困りの方はぜひお試しください。

竹研究会では、時代に沿った新しい課題について積極的に取り組んでいきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

中村)

竹はよく裏山等で地滑り防止として植えられてきたのですが、田代さんのお話によると、竹も増えすぎると反対に地滑りを起こしやすくなるのだと伺いました。やはり人の手入れが竹山にも重要で、手入れなしには逆に危険が増してしまうということでした。次に9.「里

山と文化・伝統」をお願いします。

9. 里山と文化・伝統（加藤賢三）

里山と文化・伝統の加藤です。私たちは4月30日13時から中央博物館で分科会を行い、参加者は40名でした。初めに基調講演として「里山の景観とその保全、文化の表象としての景観」というテーマで、東京情報大学の原慶太郎さんにお願ひしました。景観には自然景観と文化的景観があり、文化的景観というのは、里山で生活してきた人間と自然との関わりにおいて出来上がったものです。



これを時代背景から勉強していこうということで、縄文時代の村の分布変移について中央博物館の清藤一順さんからお話いただきました。それぞれの集落で人々がどのような生活をしてきて、どのようなルールがあったのか、どのような信仰の下に神を祭っていたのか等を学びました。中央博物館の上守秀明さんからは、神仏を大切に、ムダをださずに皆で協力して生活した縄文中期の生活、例えば東京湾周辺の中期拠点となった所には貝塚があることからわかるように、様々なものを循環させて暮らしていたようです。

笹生衛さんからは、「里山景観と神仏」ということで、話を頂きました。

里山景観の中に、神仏や信仰の場が重層的に存在し、それは毎年繰り返される人々の生活の安全や生産活動の安定を精神的に保証し、意味づけるシステムとして機能していたが、明治末期以来の農・漁業の機械化、集落周辺の耕地の宅地化、山林内の開発などにより、このシステムの機能が失われつつあるのが現在の状況かと思われます。

最後に、中央博物館の島立理子さんから、里山の景観を守っていくには、子どももいっしょに実際に里山をみて学んで、大人だけではなく子どもたちの心の中にも里山を守っていこうとする気持ちを起こさせることが大切だ、とお話をいただきました。そして、経済的に裏付けられた農林業の担保と、そこに暮らす人々が誇りをもって里山の文化や伝統を伝承していくことの大切さも原さんがおっしゃっていました。結論としては、「里山景観の保全は、持続的な農林業が営まれ

ることによって初めて成立する」ということ、これがメッセージです。

中村)

ありがとうございました。八千代市にも貝塚がたくさんあると思いますが、この貝塚の密度、千葉は世界一です。それだけ海の幸がすごかったのです。貝塚は里山につくられた、いわゆる今でいうゴミ捨て場なのですが、昔の人も今のようにゴミに悩まされたかどうかはわかりません。いずれにしろ、こういった研究を続けていくことも大切です。では次に10.「里山と森林・林業」をお願いします。

10. 里山と森林・林業（稗田忠弘）

森林・林業分科会を担当しております、稗田と申します。よろしくお願ひいたします。森林・林業は東金市との共催で、全体会のテーマである「里山とゴミ」を受けて「木質バイオマスを現代の暮らしに生かす」というテーマで行いました。現在の林地残材や製材所の木屑等はゴミとしてしか扱われてないのですが、それを資源としてみて、現代の暮らしの中に生かす工夫があるだろうということからこのテーマとなりました。午前中は、森林ウォッチングとして山武杉の森の中を、現在の間伐の状況や病害の状況を専門家に案内しても



らいながらみて歩きました。その状況を踏まえて、午後のパネルディスカッションを行いました。ここでは、林業家、製材業者からは木材の値段の問題、病害の問題から、いかに林業が産業として成立しにくい状況にあるかという報告がありました。また、地域材を使った住まいづくりをしております、さんむフォレストの建築家と、そのクライアントである薪ストーブを使っている一般市民のパネラーからは、地域材を使った住まいの可能性やその薪ストーブを使った暮らしの楽しさといったお話がありました。

結論は特にはないのですが、木質バイオマスの直接的な利用法としての薪ストーブを例にしますと、薪ストーブを使う暮らしというのは、それにふさわしい空間を求めますし外観にも表れます。地域の資源を使い、地域の自然や産業や経済の循環の中に暮らしが組み込まれていけば、それが結果的には町並みや風土の形成

に関わってくると思われます。

我々が、行政との共催でこのような問題を継続的に話し合っていく時の大きなテーマは、やはり地域の自然、産業、経済、の循環と風土をどうつくっていくかということになるのだということ、木質バイオマスを切り口にして再確認した会になりました。ありがとうございました。

中村)

なかなか手入れが追いつかなくて林が荒れると、それがゴミを呼ぶだけではなく、せつかく長年手を入れてきたのに資源として生かされずにゴミになってしまうのです。こういったバイオマスのような新しい取り組みによって、里山の木材をなんとか資源化できるようにしていかなければならないと思います。次に 11. 「里山と教育・学習」をお願いします。

11. 里山と教育・学習（上善峰男）

里山と教育・学習分科会を担当しております、森林文化研究会の上善と申します。我々は、5月14日、県立中央博物館講堂にて参加者132名を得て、シンポジウム形式で行いました。今回のテーマが「里山とゴミ」ということで、この分科会でどういったことができるかを考え、江戸時代は循環型社会だったということ、どのように人に伝えるか、数名の先生方にそれぞれの授業の展開の仕方を発表して頂きました。まず、鈴木誠さんという明和区立の小学校の先生に、現在の小学校におけるゴミの学習を、それを受けて京都教育大学の山下宏文教授に、江戸時代の人の暮らしとゴミ処理についてという6単元における授業の展開を発表していただきました。続いて、井上真理子さん、斎藤ヒサさんという研究者をお呼びし、また行政職の方にもお話をいただきました。



江戸時代は社会的にきれいな街であり、パリやロンドンに逆に糞尿にまみれた大変汚い街であったそうです。そして江戸時代には既にゴミ処理の問題に取り組んでいた、それがどのように行われていたかを知ること、そこに生きた人々の心、当時行政面でその問題に携わった公務員、侍ですが、その関係などを子どもたちに話し聞かせながら進みました。

いずれにしても、ゴミの問題というのは人の心の問題である。貧しかった江戸時代の庶民の生活が、モノを大切に作る心と次の世代のことを考えた暮らし方だったことと比べると、現代は非常に利他的である。特に、産業廃棄物の問題、建築の強度偽造の問題もそうですね、そういったその場しのぎの姿勢をまずは変えていかないと、ゴミの問題は解決していかないだろうという結論になりました。以上です。

中村)

小さな子どもたちに、ぜひ里山の素晴らしさを伝えていきたいと思えます。実は、「里山」という言葉が、去年は高校の教科書に載っていたのです。今年は、中学校の教科書にも載るようになりました。近いうちに、小学校や幼稚園の子どもたちも「里山」という言葉を使う日が来るのかな、とうれしく思いました。では次に 12. 「里山と生物・ビオトープ」今日行われたものです。よろしくをお願いします。

12. 里山と生物・ビオトープ（田中正彦）

生物ビオトープ分科会の田中です。よろしくをお願いします。今日の午前中に分科会を行い、終わったばかりです。ビオトープ分科会は、主旨として、人が適度に手を加えることで多様性が維持される里山自然の保全ということで、過去に2回このような分科会を行ってきました。今年は、里山が認知されるに従って、市民、行政、学校、そして農業者等の協力で持続的な保全が可能になった事例を紹介しました。

まず、茂原商業高校の渡邊英二先生に、学校と農業者の協力による保全ということで、農業教育者として



地元との協力による谷津田再生について発表していただきました。この渡辺先生の取り組みは、今では日本の里地里山30に選ばれるほどに再生し、ビオ田んぼ計画や、朱鷺が住める田んぼ作りを生徒と一緒にを行い、わざわざ佐渡まで朱鷺を見に行った話もされていました。

市民と行政という点では、我孫子市の岡発戸・戸部の谷津の再生ということで、阿部聡子さんに発表いただきました。2000年から池づくり田んぼづくりを行ってきて、生き物が増えていくのをわくわくしながら体

験したこと、行政、市民の協力により今年アカガエルの卵塊が 224 できたこと、これからも協力し合ってやっていきたいこと等を発表していただきました。

市民と行政、農業者の例として、新保国弘さんに発表していただきました。これは野田市の江川にある、オオタカとサシバが同時に見られる貴重な谷津田ということで、農業生産法人を作って、水田型市民農園として里山ミュージアム基本計画を策定されたそうです。これをどうこれから続けていくか、外来種の進入等の問題もあるが、がんばっていききたいとのことでした。

中村)

県の宣伝が多くなって申し訳ないのですが、県ではビオトープ推進事業というのを行ってまして、今、守るビオトープ、例えば里山は素晴らしいビオトープなので守らなければならない、そしてつくるビオトープ、都市公園や学校の校庭につくるビオトープがありますが、これをつくる時には里山をモデルにさせていただきたいのです。例えば田んぼをつくる、小さな水路をつくる、溜め池や雑木林をつくる、こうしてできたビオトープはきっと最高のものになると思います。では、これも今日行われたものですが 13.「里山と残土・産廃」をお願いします。

13. 里山と残土・産廃 (井村弘子)

残土・産廃を担当しました、井村と申します。よろしくお願いいいたします。今日、ここで分科会を行いました内容は、まず里山と不法投棄についてです。なぜ里山に不法投棄が起きているのか、なぜ今の子どもたちはこんなに悪くなってしまったのか、これは私は里山がいい加減にされていることとつながっているよう



に思います。私たちの頃は、里山にお社や神社などあって、その側で遊ぶ私たちはその神様に守られているという感じがしていたものです。しかし今では、お社もつぶしてしまって産廃などをどかっ入れてしまっている。これではとても世の中はよくならないと私は思っています。

そこで、白井町で環境白井塾を開き、町づくりと環境のこ一生懸命されている方々を今日呼びして、お話を伺いました。もう 6 年もされているのですが、

初めはなかなか人が集まらなくて、それでも続けていこうと近所のお寺でトイレを借りながら塾を続けたのだそうです。次第にこのお寺の住職さんとも話すようになり、自分も檀家の皆さんに里山の大切さをお話しているところだと意気投合し、というように次第にメンバーも増えていったのだそうです。

分科会は 2 時間でしたので前半はこのようなお話を伺い、後半は 50 人の参加者の方々から様々なご質問をいただきました。色々な場所からお越し下さっていて、熱い議論がされました。以上で集会のご報告を終わります。ありがとうございました。

中村)

里山は循環型社会のモデルです。今は循環型や、グローバルズムということで色んなものを他所に運ぶことが主流になっていますが、やはり基本的には自立することではないでしょうか。先ほどの上勝町の取り組みのように、自分のところで循環するシステムをもつことが、非常に大事なのです。しかし、今、日本のゴミは海外にまで行っている。なぜ千葉県にゴミが来るのだろう、我々のゴミはどこに行っているのだろう、ということをしっかり考えていかなければならないと思います。では次に、14.「里山と都市農業」これも今日行われたものですね。よろしくお願います。

14. 里山と都市農業 (金親博榮)

今日は午前中に、市民農園を核とした都市農業の保全と展開ということで、この開催地の都市と住民と農業の存続を非常に意識した講演会となりました。講演会のスピーカーは、千葉県市民農園協会の廻谷義治理事長です。千葉県の市民農園活動は日本の農園活動の中でもまとまったしかりとして活動をしておりまし



て、日本の対外的活動の代表組織といっても過言ではないような活動を全国的、世界的にも展開しているところです。基本的には、市民農園は都市住民の不可欠な緑であると強調しました。特に八千代市は、日本の中でも一番歴史の古い市民農園の発祥の地といえるような場所なのですが、今では街の中から市民農園が減少しつつある街の一つになりつつあるのです。これは非常に大きな問題であると、私は他所者でありながら改めて市民農園を核とした農のある都市、八千代市を

復活させて欲しい、そしてそれは、日本の再興につながるのだという意気込みでお話をさせていただきました。

外国の事例も廻谷さんからたくさん発表していただきましたが、結局は日常的に農への活動ができるという近場の緑の保全につながる都市の緑をもっと大事にしよう、これは都市住民だけの問題でも農家だけの問題でもなく、里山全体と同じように私たちが子孫をいかにしっかり育てていくかということにつながるのだと、イギリスの例などからもお話いただきました。

基本的には、農業も林業もそこから得られる経済的効果によって再投資ができるようにしていこうというのがあります。千葉自然学校というところでは、自然を生かした観光ビジネスをもっと活発にさせようという取り組みも行っており本も出しておりますので、ちょっと触れさせていただきました。以上で報告を終わります。

中村)

みなさん、ちょうど半月くらい前のある新聞の夕刊のトップページに、「土日は農業が流行」という記事があったのを覚えていらっしゃる方もいるかと思います。ちなみにある博物館にお勤めの方が、土日は農業、夜は大学にかよって町づくりを学んでいるという記事でした。私も博物館の職員として複雑な思いがしました。まさにそういう時代になってきています。八千代市も素晴らしい立地ももっていますので、経済的なものも含めて新しい街を考えていただけたらと思います。

ここまでが今日までに行った分科会になります。これからは、まさにこれから開催が予定されている分科会の紹介になります。まず、15.「里山と谷津森人」をお願いします。

15. 里山と谷津守人 (日向 正彦)

15分科会を担当しました、我孫子市からきました日向と申します。よろしくをお願いします。



里山と谷津守人分科会では6月13日土曜日10時から、我孫子市近隣センターこもれびにて、「谷津守人の保全活動からカエル復活をみる」というテーマで開催

します。近隣センターこもれびはJR成田線の東我孫子駅から徒歩10分のところにあります、当日は浅間茂先生から、「谷津の自然の魅力とそれを守り育てるために」と題した講演と、近くに広がる我孫子市岡発戸都部の谷津での現地報告会を開催したいと思っています。

これまでこの谷津での、ニホンアカガエルの卵塊数は年平均29~34個くらいだったのですが、ザリガニやウシガエルが多い中で、なぜか今年は突然に2月9日~4月3日の55日間にわたって、例年の6倍の224個の卵塊が発見されました。なぜ今年はこんなにも増えたのか、特別な対策が行われたのか等を現場をみながら説明会を開催したいと思っています。

皆様のご参加をお待ちしています。以上です。

中村)

我孫子市は昨年この全体会を行わせていただきました。今年は、市の職員の方を始め市民の方にも大勢来ていただいています。ご存知のように我孫子市には谷津ミュージアムがあります。私もずっと関わってきたのですが、ここは本当に先進的な里山・谷津田の保全の取り組みを行っておりまして、もう10年以上の歴史になります。昨年のご存知のように、コウノトリがやってきました。ですから今年も谷津ミュージアムの中に、コウノトリの谷かなんかつくって、コウノトリが毎年来てくれるようにしようと提案をしています。どうもありがとうございました。次に16.「里山と田んぼ」をお願いします。

16. 里山と田んぼ (相馬由起子)

第16分科会、里山と田んぼの相馬と申します。当初、当分科会では環境直接支払いをテーマとしていました



が、これは来年からの導入が予定されているものです。しかし内容的に検討を要する部分が出てきてしまったため、テーマを変えさせていただくことにしました。新しいテーマは、「里山と田んぼと食と農とこれから」というものにさせていただきます。

当日の報告者としては、日本雁を保護する会の呉地正行さんに「冬水田んぼの現状とこれから」、作家の金丸弘美さんに「スローフードの現状とこれから」、白石嘉宏さんから「小見川町のローハスホビー村の立ち上

げについて」、渡邊英二さんから「田んぼの生き物調査から見る現場の農業について」、金親さんから「田んぼと食と農について」、桜ノ宮自然公園の所さんから「産廃業者との対決について」のご報告をいただきます。そしてそれを基に、参加者のみなさんと意見交換していきたいと思ひます。

これまでこの里山と田んぼという分科会では、田んぼの生物多様性について話し合ってきたのですが、先ほどもいいました環境直接支払いや残土産廃、成田高速鉄道、印旛沼の水循環の健全化など、今、田んぼをめぐる様々な問題が起こっています。市民、地域に暮らす私たちが、何をどのように考えていったらいいのか、についての一つの勉強会になればいいなと思ひておりますので、ぜひご参加ください。プログラムでは6月3日土曜日の14時からになっていますが、18時～21時に変更させていただき、場所は京成佐倉の隣にありますミレニアムセンター佐倉、第一会議室で行いますので、たくさんの皆さんのご参加をお待ちしております。よろしくお願ひします。

中村)

ふゆみずたんぼというのは、印旛沼水循環健全化会議の方でも行っている取り組みですが、冬にも田んぼに水を張ると生き物が非常に豊富になる、肥料を使わなくてもいいので安全で有機的なお米ができる、そして水の浄化にも役に立つ、さらにそのお米は3倍くらいの値段で売れるのだそうです。その辺のお話も6月3日に行われると思ひますので、ぜひ皆さんお越しいただければと思ひます。では次に17.「里山と食」よろしくお願ひします。

17. 里山と食 (上地智子)

第17分科会、里山と食の発表をさせていただきます。



千葉自然学校の上地と申します。どうぞよろしくお願ひします。昨年は、鴨川市大山千枚田で「みんなで語ろう千葉の食」をテーマに行いました。今年は、千葉コープと千葉大学と協力して計画した、八街の森スマイル八街のオープンと重ねて、食という視点から新たに里山と人の関係作りについて考えてみたいと思ひています。

スマイル八街の森は、千葉コープの呼びかけの下、

地域住民、農業林業者、大学、各種関係グループが一体となって今年から発足した団体です。千葉県八街市内の森を舞台に野うさぎが住み、人が集う里山を目指して、子ども、食と健康、環境、福祉をテーマに様々な取り組みを行っております。

キーワードは、8つのスマイル、遊んでスマイル、育ててスマイル、食べてスマイル、つくってスマイル、感じてスマイル、伝えてスマイル、みんなでスマイル、未来にスマイルです。ここに来るすべての人が笑顔で過ごせるような、ほっとする里山の風景をつくりたいと思ひています。

みなさんご存知のように、昭和30年代の薪から石油ガスへと変わった燃料革命が起こるまでは、里山で一年中の薪の確保をし、春は山からの絞り水で大量の水を確保し、豊かな山野草をもたらす大切な場所でした。日々の暮らしに大きく関わり、人の手が入り大事に管理され、谷津田、小川、川、海へとつながり、多様な生き物が生息できる環境が育まれていきました。しかし、薪が不要になり用水路ができ、大規模で機械化された農作など暮らしや農業の変化に伴って里山は荒れ、里山に簡単にゴミが捨てられる等モラルが低下してしまい、私たちの生活環境にも影響ができています。

このことから、里山をみんなで楽しみ保全していく、人と里山のいい関係を新たに作り出していきたいと思ひ、今回の分科会を企画しました。里山と人のかかわりとしてまず、畑や田んぼなどのつくる場所、それを食べる場所、生き物や自然と触れ合うことができる遊ぶことのできる場所として、スマイル八街の森の里山で遊び、お腹をすかせておいしく食べる、里山と人のかかわりをつくり出す一年プロジェクト計画づくりを行おうと考えています。そこで千葉大学園芸学部のフィールドコラボレーションという授業を受け、八街の森を管理している千葉コープと連携し、これからは担う若者の視点と地元農家そして消費者を交えて話し合い、八街の森が私たちの暮らしと深く関わりながら保全され、地域が元気になるような取り組みができないかと、この分科会で考えていきたいと思ひています。分科会の開催は、6月10日土曜日です。どうぞよろしくお願ひします。

中村)

千葉の郷土料理を調べている方のお話を伺うと、千葉はお漬物が少ないそうです。それだけ千葉は海や山の恵みがあり、新鮮な食材がいつでも手に入ることだと思います。今、よく言われる塩分控えめで健康にもいいですね。食に関しても、千葉の里山・里海の自然の素晴らしさを我々は享受してきたのです。では最後になりますが、「里山と芸術」お願ひします。

18. 里山と芸術（宮村賢治）

「里山と芸術」分科会の発表をさせていただきます、千葉大学の宮村賢治と申します。この分科会の開催は8月頃を予定していますが、どのような分科会なのか知っていただくために、ここでは昨年度の活動を紹介いたします。舞台は千葉市緑区越智町の大藪池谷津田と呼



ばれている場所です。活動を行っているのは千葉アートネットワーク・プロジェクトという千葉大生、美術館、NPO、福祉施設などで構成されている団体で、この度の企画ではその一つ「プロジェクトとけ」という大藪池周辺の市民の方で構成されている谷津田の保全を目的としている団体が中心に関わっています。活動内容は、谷津田の周辺に生えている竹を使ったドームづくりと竹をつかった楽器づくりを5月に行ったのを皮切りに、8月に中央博物館の大庭照代先生が開発された「ききみみずきん」という音声識別装置をつかって、谷津田の鳥や虫の声を聴いてみようというワークショップを行いました。更に10月には磯崎道佳さんという現代美術作家をお招きして、周辺地域の福祉施設や小中学校、地域の住民の方合わせて300人くらいでビニールの人型を集めて、谷津田の中に長さ40m高さ10mくらいの透明のドームをつくり、そこに集めた人型を貼った作品をつくりました。そこで周辺地域の方々の交流を図りました。谷津田の中で活動をして、谷津田を知ってもらうことから始めようということで、今年はゴミをテーマに8月の開催を予定しております。谷津田の保全と環境学習という目的でアートに関わるワークショップを予定しておりますので、よろしくお



願いたします。また、昨年の活動の冊子をロビーでお配りしておりますので、是非ご覧ください。

中村)

アートというのは様々な人のつなぎ役になる、色々な人に里山に関心をもってもらう一つのきっかけになります。特に若い人たちの力を里山に投入できればいいなと思います。

以上、18分科会の報告と今後の予定についてお話をさせていただきましたが、最後に私なりの感想を述べさせていただきます。

ゴミだけではなくて里山に関係する色々な専門分野について話をさせていただいたのですが、ゴミに話を戻しまして、なぜ千葉県にはこんなにゴミがあるのかを考えてみたいと思います。どうも千葉県の皆さんはゴミに関心がない、ゴミを捨てられてもあまり大変だという感覚がないのではないかと思います。それはどうしてかと考えると、実は千葉は昔から裕福な所で、海から山から色々なものがとれた。その余ったもの、すなわちゴミを海や野山に捨てるというか戻っていて、それは資源の再利用状態だったのです。そのイメージを今でも持っているのではないかという気がするのです。しかし、今のゴミは毒です。捨てておいたら危ないのです。そういうことをもっと我々大人が認識する必要があるのではないかと思います。

先ほど上善さんから、江戸時代のゴミのお話がありました。実は江戸時代にも公共事業でゴミの収集がなされていたようです。ゴミ請負人というひとが村ごとにいたようです。あるとき、大きなゴミ請負人が幕府に「我々が全てのゴミを請け負えば安くつきますよ」と申し出たそうなんです。そこで幕府は、各村にこういう申し出があるがどう思うかと聞いて回ったところ、村ではよそ者にその時だけゴミをもって行ってもらうのでは困るという返事だったそうなんです。それぞれの村にいるゴミ請負人は、ゴミをただ運ぶだけではなくて、ゴミにかかわるプライバシーを守ったり、運ぶときの道普請も含めておこなっていたようで、単なる経済的な効率だけでゴミ処理を考えるのではなく、地域の人々の暮らしや人間関係も含めて考えてもらいたい答えたのだそうです。そうしたら、幕府はわかったとそのまま村々にゴミ請負人をおき、存続したのだそうです。

ゴミ問題というのは、自分も含めて加害者になりますので、やはり地域ごとに自立して人間関係をしっかりすることが基本なのではないかと思います。

この後のシンポジウムでは、その辺りも含めた突っ込んだ議論がされることを期待して終わりにしたいと思います。

皆さんありがとうございました。